

日野弘資・資茂父子と京都大学蔵本『先代御便覧』巻九

柳 瀬 万 里

(キーワード 十七世紀 先代御便覧 日野弘資 資茂 宮廷和歌 江戸時代)

1

十七世紀初め、徳川政権が全国を統括し世の中が安定しはじめると、長い戦乱の世を生き延びたことへの証として、ほとぼしる生命のエネルギーを文学に対して注ぎ込もうとする人々が出現する。

その第一声は、寛永期の宮廷においてあげられたと言ってよい。すなわち後水尾院宮廷における文学活動がそれである。後水尾宮廷の歌人たちの活動については拙稿「後水尾宮廷の歌人」¹⁾や鈴木健一氏『近世堂上歌壇の研究』²⁾などに詳しく報告されているところである。

日野弘資(1617-1687)は、後水尾院宮廷歌壇における新進気鋭の宮廷歌人として多くの人々の期待をになった一人であった。院主催の和歌会や連歌会を始め、漢和連句会、俳諧漢和連句会、百人一首御講釈等に頻繁に出席し、その文学活動の足跡を多く今日に残している。

年若い宮廷歌人弘資はたとえば次のように、後水尾天皇の中宮和子から報賞を与えられるのであった。当時弘資は十七歳、弘資の祖父日野資勝が、自身の日記『資勝卿記』³⁾に次のように書留めている。その部分を引用する。(以下翻字は稿者、句読点は私に付す。)

朝之間二、天野豊前守ヨリ、日野侍従、藤右衛門佐、柳原権佐、烏丸侍従、国母様御用ニて召候間、午刻伺公申候様可申由、折紙参候間、相心得候由返事申候、各相約して、又四人ノ衆、午刻伺公可仕由、書状ヲ天野豊洲へ遣申候也、飛鳥黄門へ、短尺書誤申候間、所望申候へハ、晩二、二枚持給候条、則書清して、弘資短尺一度二、飛鳥井殿へ持遣候也、今日、国母様にて、弘資、藤右衛門佐、柳原権佐、両

三人者巻物二巻ツハ、烏丸侍従ハ、巻物ニツ唐織物小袖老ツ、拝領候也、是ハ今度之御会清書、又歌之御褒美之由也、烏丸侍従ハ年齢ニ殊奇特之由にて別而ノキ也、⁴⁾

これによると、この日の朝、天野豊前守⁵⁾を通じて日野侍従(日野弘資)、藤右衛門佐(平松時庸)、柳原権佐(柳原資行)、烏丸侍従(烏丸資慶)の四名を伺公させるようにとの折紙が東福門院から資勝の元に届けられた。弘資らは、午刻に伺公する旨の書状を天野豊前守に届けたのち、その通り伺公した。すると東福門院は、この日の前々日九月九日に仙洞御所において催された和歌御会の褒美として、弘資、時庸、資行に対しては巻物二巻ずつを、資慶に対しては年齢の割に特に感心なこととして唐織物小袖一着分を余計に与えたのであった。

また祖父資勝は、しばしば仙洞御所や女院御所にも弘資を同行して伺公した。『資勝卿記』⁶⁾に次のように記す。

国母様へ、広中公子、飛鳥井中納言、右衛門佐平松殿、弘資同心候て参候、

この日、広橋(兼覧)、飛鳥井(雅章)、平松(時庸)、弘資が女院御所へ資勝に伴われて参内した。また同じ年、

晩に弘資、明後日哥談合ニ参候也、⁷⁾

とあって、夜になって弘資は翌々日の和歌会に出詠する和歌の指導を受けるために、資勝のもとを訪れているのである。その歌会の様子は同じく『資勝卿記』⁸⁾に次のように記される。

*1 『国語国文』49-8 (1980年8月)

*2 汲古書院、1996年11月刊

*3 宮内庁書陵部蔵

*4 寛永10年(1633)9月11日の条。

*5 寛永元年、徳川和子を後水尾院の中宮に冊立するにあたり設けられた中宮職のお附武家に任じられ、以後和子の女院宣下により中宮職が廃止された後も東福門院に仕えた。

*6 寛永10年9月17日の条。

*7 寛永10年11月12日の条。

*8 寛永10年11月14日の条。

今日和歌御会御参輩、実晴卿、時庸卿所勞御理、隆朝朝臣、季福朝臣、弘資、実為、此分折紙へ書立申候也、

この日の和歌御会には（西園寺）実晴と（平松）時庸は所勞の為に欠席し、（櫛笥）隆朝、（裏辻）季福、弘資と（小倉）実為が出席する旨を折り紙に記して資勝が届けたのであった。

このように数箇条を掲出したのみであるが、宮廷歌壇の堂上歌人たちは、年長者である指導者が若年者の為に禁裏や仙洞からの連絡や引率を行い、日野家のような和歌の家では、祖父と孫の間で和歌指導を行っているのである。このことは家の学問である歌学が重要視されていたことを示している。

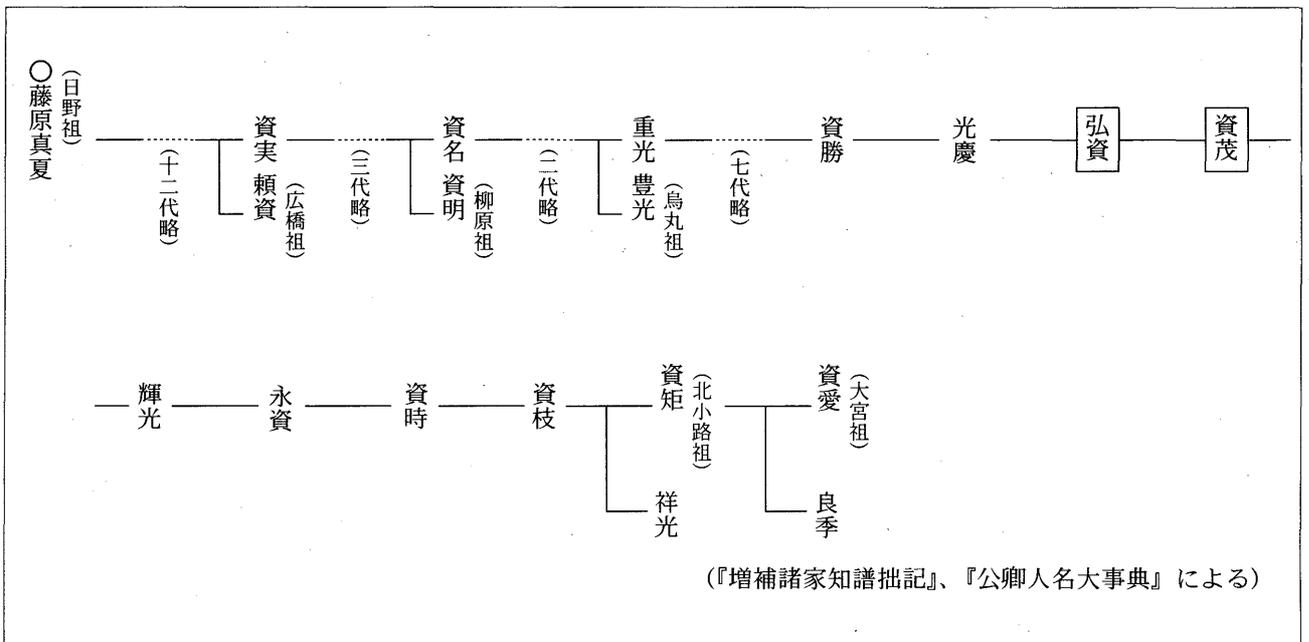
日野家において集積された学問は、そのすべてではな

いにしても、ある時期のかなりな量が『先代御便覧』という書物の形で保存されており、はやくに「先代御便覧目録」として学界に目録の紹介がなされている。¹主として宮内庁書陵部および京都大学文学部図書室に写本として伝わるが、このうち宮内庁書陵部『先代御便覧』に記載される『毛利甲州被尋条々』²および『諸国名所和歌』³が翻刻され公刊されている。

本稿では、京都大学所蔵『先代御便覧』の巻九についての若干の報告と考察を行おうとするものである。

2

論述の都合上日野家について少しふれておきたい。弘資の業績等については、拙稿「日野弘資—彼の和歌とその環境—」⁴に既に述べているところである。



日野家系図

日野家は、藤原真夏を祖とする。日野流からさらに広橋流、柳原流、烏丸流、日野西、など十家以上に分かれる。

前述の『資勝卿記』の記事にこれらの家との親交がうかがえるのは、養子縁組あるいは分流などでつながるグループが、近世公家社会における日常的な文化的活動の核として存在していることを示している。日野嫡流は家禄千百五十三石、儒道、歌道の家とされる。俊光くらい早世した人を除いては、ほとんどの人が大納言に至っている事から、大納言を先途とした家柄であることがわか

る。弘資の父光慶は、四十歳で没したので、権中納言よりは昇らなかったが、弘資の祖父資勝は、権大納言に至り、弘資も同じく権大納言に至っている。

資茂と輝光はともに弘資の子であるが、輝光の嫡子永資は十九歳で早世したために、跡継ぎがなかった。そこで侍従豊岡弘昌の子を家督養子としたのが資時であり、さらに資時の代には烏丸光栄の末子資枝を養子とした。

『先代御便覧』の編纂時期については、この永資から資時に至る時期との関連性が考えられるようである。

¹橋本不美男・井上宗雄・福田秀一『和歌文学研究』13 (1962年)

²小高道子・坂内泰子・翻刻『中京大学教養論叢』42-2 (2001年)

³小高道子・金田房子・翻刻『中京大学教養論叢』43-1 (2002年)

⁴『国文学論叢』第23輯 (1978年1月)

3

『先代御便覧』(京都大学蔵本)の概要を次に記しておく。

- 1 冊数： 全十一冊
- 2 分類番号：

国文
A h.
29
- 3 綴じ： 和綴の袋綴。
- 4 寸法： 縦 29.3 cm×横 20.9 cm
(第四冊のみ縦 26.0 cm×横 20.2 cm)
- 5 表紙：全冊無地で本文とはやや異なる厚めの楮紙二枚重ね。
- 6 用紙：楮紙。
- 7 題簽：直題簽(墨書)。
- 8 外題：「先代御便覧三」(第三冊)
- 9 各冊メモ：
 - 第一冊 目録。全丁白紙(後に目録内容を清書する予定であったかと推測される)。表紙右肩に次のような貼り紙有り(第一冊のみ)。
「和歌之部 日野家文庫 集本拾壹冊」
 - 第二冊 奥書なし。
 - 第三冊 全150丁。数カ所に各10丁余の白紙を含む。奥書は次の通り。
「御自筆本有三冊今合而為一冊
右一冊者祖父一一卿取被選集
者別以彼卿御自筆本令新写
座右珍予亦 管見可為追加
而已
享保十年三月中浣
孫藤原資時」
(150丁裏)
 - 第四冊 奥書なし。
 - 第五冊 奥書は次の通り。
「右借光榮卿本馳禿筆書
資時」
 - 第六冊 奥書なし。
 - 第七冊 二冊合綴。
 - 第八冊 奥書なし。
 - 第九冊 奥書なし。
二冊合綴。
第一丁表中央に次のような貼り題簽
(縦 16.7 cm横 4.4 cm)
「故中納言 資茂卿 雜記」
第三十二丁表中央に次のような貼り題簽
(縦 15.7 cm横 3.3 cm)
「後十輪院通村公和歌雜談」

第十冊 二冊合綴。

奥書は次の通り。

「右一冊 筆之本有之
故借或人本自補闕分自己
享保七年 弥生 上澣
資時」

第十一冊 第二丁に貼り題簽(縦 15.3 cm横 2.9 cm)

以上京都大学所蔵『先代御便覧』は全十一冊のうち、第一冊は白紙を冊子形態に綴じただけのものであり、表紙に張り紙のみがある。これは当初目録記入用として準備され、後にその内容を書き込むつもりであったのではないだろうか、と推測される。

第七冊・第九冊・第十冊の三冊に合綴が見られる他、合綴されていない第三冊には10丁余の白紙が数カ所に存するところから、後に白紙部分に書き加えて内容を補填する予定であったことをうかがわせる。

内容は、未整理ともいえるものであり、全体的に本書は草稿本に近いものと言わなければならない。未整理で有り、書留的性格の本書であることが興味深いものとなっている。本書の魅力は、あるいはその未整理性につきるともいえるのであり、今後内容の精査が待たれるところである。

4

次に京大本『先代御便覧』十一冊のうち、第九冊に限ってその内容を簡略にはあるが、以下に記しておく。

第九冊は、合綴で内題「故中納言 資茂卿 雜記」が第三十三丁まで、内題「後十輪院通村公和歌雜談」が第三十四丁から第八十八丁までとなっている。弘資の嗣子資茂の雜記を後の人が取りまとめた形になっている。その内容の項目を順次掲出しておく。(001～の数字は稿者の付した整理番号)

- 001 「観音哥会 作者不知」
- 002 「六君子」
- 003 「平胃散」
- 004 「町筋ノ哥」
- 005 「十五番哥合の奥書二」
- 006 「胡椒」
- 007 「於住吉社述懐和歌一首哥序」
- 008 「さる人 老父方へ不審ヲ尋事」
- 009 「老父返答 被尋越候条々一覽了」
- 010 「塙宗 尋越候条々」
- 011 「延宝五三月三十日一昨日二十八日御当座詠草 法皇御覽」
- 012 「延宝五年二月二十九日」

- 013 「延宝五五二十五 御内会の内」
 014 「一或人弘資卿に被尋しの哥案時案ずる程あしく時御座」
 015 「弘資卿被語云」
 014 「右御会之沢本二」
 015 「弘資卿云トカク哥也」
 016 「一通茂被語予哥弘資卿と格別の様にかきけれどもそれ程」
 017 「同年六月二十五日 御内会」
 018 「延宝六年二月十七日」
 019 「延宝六年六月十九日東福門院崩御二付 法皇御製」
 020 「法皇仰由也」
 021 「延宝六年十二月二日故光慶卿五十回忌於相国寺慈相院法事アリ 五十首の詩哥」
 022 「延宝七九月二十六日 詩哥御当座」
 023 「延宝八十二十八御内会」
 024 「先年老父於江戸見候懐紙正筆之由写一覽了」
 025 「法皇御作 三十六人哥仙作者次第」
 026 「同御作二十一代集次第」
 027 「通村公筆花鳥巻物之奥書 佐川峻庵所望」
 028 「延宝九年三月三日依御参内俄有り御会出第 雅豊朝臣」
 029 「詠百首狂哥 幽長老五拾九点之内長十五 也足判」
 030 「後十輪院通村公和歌雑談」

以上、第九冊の雑多な書留から項目を順次掲出した。

5

日野家には、家の歌学書として『日野殿三部抄』¹がよく知られているところである。同書は『近世歌学集成上』に立教大学蔵本を底本として全文翻刻が収載され、次のような解題が付されている。

全三部よりなる。第一部は、仙台伊達家支藩の一関藩初代藩主田村宗永が、当代第一級の歌人日野弘資から、詠歌の初学者の心構えや、敬語に対する見解を聞き書したもので、かささぎの条以下の部、第二部は、萩毛利家支藩の長府藩第三代藩主毛利綱元が、同じく日野弘資に聞き書したもので、雨の夕ぐれの条以下の部、第三部は六百番歌合の俊成の判詞に関連して日野弘資が当代の心得を述べた、御階のきは之条以下の部である²。

京都大学文学部所蔵『先代御便覧』第九冊と『日野殿三部抄』との間において、何らかの関係が推測されるところでは有るが、今のところ内容的に重複する部分は見あたらない。また、第九冊には延宝五年から九年の和歌会からの抄出が年を追って記載されているが、このことから本書は、収集の時点において、すでにクロニカルな編纂意図が存在していた事がうかがわれる。

第九冊には、009「老父返答 被尋越候条々一覽了」や024「先年老父於江戸見候懐紙正筆之由写一覽了」のような「老父」の表記が数カ所に見られるのであるが、老父とは日野資茂から弘資をいったものと考えられる。さらに016「一通茂被語予哥弘資卿と格別の様にかきけれどもそれ程」の項目の「予」の傍らには「資茂」の注記が見られる。第九冊の内容は日野弘資に関係する記事が多く、弘資に対する呼称は「卿」が付されている事が少なからずあり、資茂の名と併記される場合に、資茂には敬称がない場合も多い。

『先代御便覧』の成立については現在不明な点が多く今後の研究に待たなければならないが、日野資時(1690-1742)がかかっている事が考えられることは前にすこし触れた。

資時は侍従豊岡弘昌の子であり、元禄7年(1694)叙爵し、同14年元服した後、従五位上に進んで、侍従に任じられた。享保3年(1718)正五位下右小弁日野永資の家督養子になった。二十九歳の事である。永資は、それより7年早く正徳2年(1712)2月2日、十九歳ですでに没していた。第三冊奥書に記されている享保十年(1726)には資時は、三十六歳に達し、家督養子になってから9年の歳月が過ぎていたのである。しかし、烏丸光栄の末子資枝(1737-1801)が資時の嫡男となつたのは寛保2年(1742)のことであった。家督養子となつてのち、資枝を嫡男として迎えるまでの23年を資時は当主として日野家を守らなければならなかつたはずである。

ところで先に引用の解題にも記すように日野家の歌人の中では、もっとも高名な人は弘資であろう。

推測するに資時が、日野家の宝典とも言うべき伝来の和歌の書物を集めて『先代御便覧』と命名することは、彼のおかれた立場からも十分考えられることではなかろうか。第九冊においては、日野弘資の和歌関係の記録類を中心に、その嗣子資茂が収集し、後代の日野家の誰か、一すなわち資時の可能性が大きいと稿者は考えるが、が大系的に整理することを試みたが完成されなかつた、というようなことが、一つには考えられてくるのである。

¹ 渡辺憲司・横倉浩一・倉島利仁翻刻(『近世歌学集成上』)所収・平成9年10月明治書院刊

² 同書959ページ。引用にあたり一部注記を省略した。

なお、最後に第九冊の中から数項目を翻字して次に掲
出しておく（濁点は稿者）。

001「観音哥会 作者不知」

観音哥会 作者不知

右 聖観音

いくひさし蓬の原に引むすびよし川端のうぐひなれども

左 千手観音

数の手に露のめぐみをそそがすはなにをかつみにくみの
八千友

(以下略)

004「町筋ノ哥」

町筋ノ哥

寺御幸ふや富柳さかい頃あいのひかしに車鳥

室衣新釜乃座に西洞院小川油に堀のいのくま

りうかむろ衣の釜西小川油堀川よしやいのくま

(以下略)

008「さる人 老父方へ不審ヲ尋事」

さる人

老父方へ不審を尋事

御不審申し上の義

みよしのと申ハ吉野ト同じ所のやうに承候三ト御座候も

在て御字も書申し候三ト御座候

かげろふと申ハとなぞと申虫の由に御座候、是又かげ

そふ正躰奉承

(以下略)

011「延宝五三月三十日一昨日二十八日御当座詠草 法
皇御覧」

延宝五三月三十日一昨日二十八日御当座詠草 法皇御覧

梅風 雅章卿

心ある他が袖にきてにほふらん空にみちたる風の梅かな
春風のねざめの袖に吹とめて夢のなごりもにほふ梅がか
難波津の春風しるくにほひ出ぬことばの種とさくやこの
花

(以下略)

012「延宝五年二月二十九日」

延宝五年二月二十九日 後十輪院二十五回忌通茂卿勸進

致法清涼

うき雲のまよひはれゆく風のあとはみどりのえ所きよく

すずしき

幸仁

未掌賤眠

をしへをく六のつとめをおもふにはいたづらにやは手に

あかすべき

道晃

唯一条法

世をてらす月日にもみよ二つなく三つなきのりのふかき

こころぞ

基熙

(以下略)

付記 本稿は国文学研究資料館平成9年度公募共同研
究「『先代御便覧』の研究」および同11年度「近世和歌
御会の基礎的研究」における稿者の研究報告を一部分元
にした。なお貴重な資料の閲覧を御許可下さった京都大
学文学部図書室に御礼申し上げます。

Hirosuke Hino · Sukeshige Hino and the volume 9 of "Sendai-Gobinran" owned by Kyoto University

Mari YANASE(AKAMATSU)

Key Words:

the 17th century

Hino family

Sendai-Gobinran

the Edo period

Waka (classical Japanese poetry) by the Edo aristocracy

"Sendai-Gobinran", an informative collection of books on Waka of Hino family, are at present possessed partly by Kunai-cho Shoryobu (the Imperial Household Agency, Document Section), and partly by the Literature Department of Kyoto University. The volume 9 of the collection is also named "Ko Chunagon Sukeshige Kyo Zakki (a Memorandum of a Nobleman, late Chunagon Sukeshige). This is Sukeshige's memorandum of what was accumulated in Hino family and of what was passed down onto him from his father, Hirosuke Hino.

Here, in this bulletin, the following two points are aimed;

- 1 To decipher the volume 9, and
- 2 To examine the contents of his memorandum.